

## 内海本土近接型離島における空間印象評価構造に関する研究 —松山市興居島をケーススタディとして—

愛媛大学 学生会員 ○大石琢也 愛媛大学 正会員 松村暢彦

### 1. 背景と目的

離島は地理的条件の不利性に加え、生活航路の廃止や減便による交通の利便性の低下といった社会的条件の不利性が増大している。離島のなかでも内海本土近接型離島は、本土にある中心的な都市から航路 1 時間圏内で航路が静穏で欠航がほとんどないとされていることから、観光振興による離島活性化の潜在的可能性が想定される。そこで本研究では、本土からの来島者が離島から受ける印象に着目し、内海本土近接型離島を構成する要素と印象評価の対応関係を明らかにすることを目的とする。ケーススタディ地域として松山市興居島を取り上げた。興居島は、松山市北部の沖合約 2km に位置し、松山市中心部から伊予電鉄と船を使って 1 時間以内でアクセス可能である。「興居島みかん」「興居島いよかん」と呼ばれる柑橘類の栽培が盛んであるが、人口は 2010 年現在、1279 人で減少傾向が続いている。

### 2. 調査の概要

来島者がどのような行動をとり、どのような要素に反応し、対象地域に対してどういった印象を受けるのかを把握するために、アンケート調査を行った。アンケート調査は、2014 年 11 月 6 日(木)～11 月 25 日(火)の期間に、33 名の愛媛大学の学部生の男女を被験者として実施した(男性 30 名、女性 3 名)。まず、被験者に対象地域を自由に散策してもらい、散策時の行動に関する項目を調査シートに記入してもらった(図-1)。調査シートには①対象地域を訪れた経験及び対象地域に関する認知度、②散策中の行動と散策経路、③散策中に気づいたことを記入してもらった。③については、散策中印象に残った場面や事柄やもの、思い出すものなど、気づいたことについて、その都度、数に限りなく自由に記入してもらう方法をとった。②や③を記入した場所を特定するために、付属の地図に調査シートと対応する番号を記入してもらうとともに可能な限り写真を撮影するように依頼した。その後、散策後の印象については、SD 法を使って対象エリアを訪れた後の印象を心理量として客観的に把握した。SD 法に用いた評価尺度は、対象地の特徴を考慮して、29 の形容詞対を抽出した。さらに、エリアに対する総合評価として、好ましさを表す形容詞対の「好き - 嫌い」を加えた、7 段階、30 項目の評定尺度を用いることとした。

| No. | 行動、印象に残ったもの、気づいたことなど | 写真 | No. | 行動、印象に残ったもの、気づいたことなど | 写真  |
|-----|----------------------|----|-----|----------------------|-----|
| ①   | 波の音が聞こえた、静かな印象を受けた   | 1  | ④   | 昔っぽい家があった            | 4   |
| ②   | 地元のみかんを購入した(行動)      | 2  | ⑤   | 画一的でない路地だった          | 5、6 |
| ③   | とても急な坂があって大変だった      | 3  | ⑥   | みかん畑がたくさんあった         | 7   |



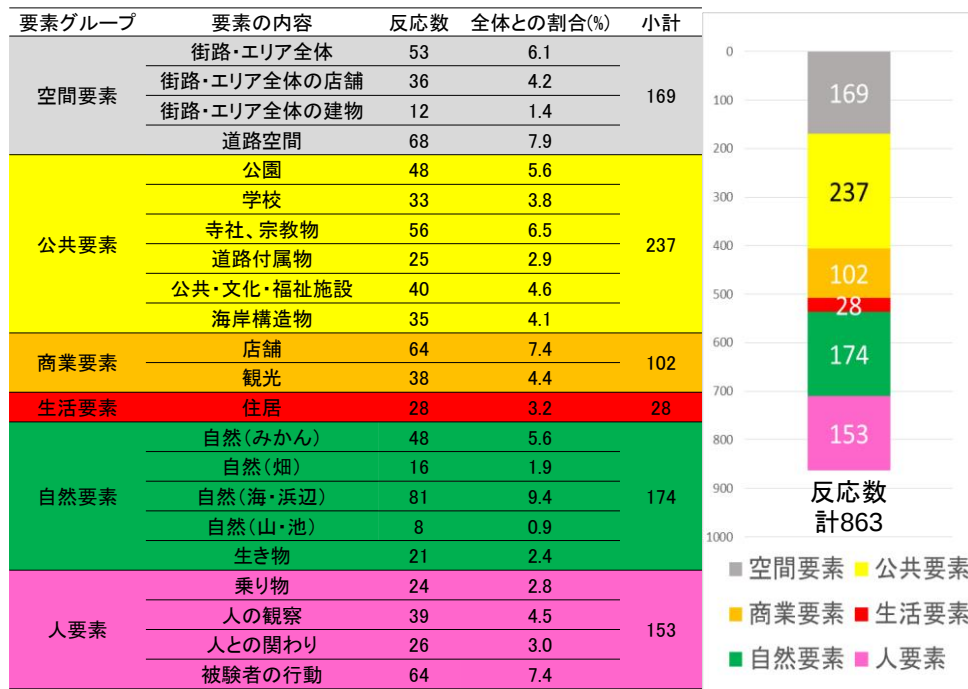
図-1 調査シートの記入例

散策時に被験者が反応したものを、KJ 法を用いて分類したところ、空間要素、公共要素、商業要素、生活要素、自然要素、人要素の 6 つ要素グループに分けることができた(表-1)。その構成比は、寺や公園、海岸線の堤防など公共要素が 31%、ついで海・浜辺、みかんなどの自然要素が 20%、街路やエリア全体の印象が 19%となった。対象地域に対する印象の評価構造を明らかにするために、心理量の測定に用いた 29 の尺度項目について因子分析を行った。分析では、相関行列の固有値 1 以上という基準を採用し、主因子分析法により因子負荷量を求め、さらにバリマックス回転を適用した。その結果、《愛着》、《発展性》、《意外性》、《落ち着き》、《生活感》、《親しみ》の 6 つの因子が抽出された。さらに 6 つの因子の因子得点と総合評価との相関分析により、総合評価に影響する心理的因子を抽出した結果、「楽しい」、「温かい」、「愛着のある」「雰

### 3. 分析結果と考察

散策時に被験者が反応したものを、KJ 法を用いて分類したところ、空間要素、公共要素、商業要素、生活要素、自然要素、人要素の 6 つ要素グループに分けることができた(表-1)。その構成比は、寺や公園、海岸線の堤防など公共要素が 31%、ついで海・浜辺、みかんなどの自然要素が 20%、街路やエリア全体の印象が 19%となった。対象地域に対する印象の評価構造を明らかにするために、心理量の測定に用いた 29 の尺度項目について因子分析を行った。分析では、相関行列の固有値 1 以上という基準を採用し、主因子分析法により因子負荷量を求め、さらにバリマックス回転を適用した。その結果、《愛着》、《発展性》、《意外性》、《落ち着き》、《生活感》、《親しみ》の 6 つの因子が抽出された。さらに 6 つの因子の因子得点と総合評価との相関分析により、総合評価に影響する心理的因子を抽出した結果、「楽しい」、「温かい」、「愛着のある」「雰

表-1 散策時に反応した空間要素の分類



囲気のある」に代表される《愛着》因子が総合評価に影響していることが明らかになった。そこで対象地域に対する空間印象と空間構成要素との関係をみるために、性別、対象地域への訪問経験、対象地域に関するイメージの有無などの個人属性と散策に要した時間といった散策状況とあわせて各要素グループへの反応数と、心理量測定によって得られた各尺度項目の得点データとの相関分析を行った。総合的評価と影響する愛着因子に関わる分析結果を図-2に示す。その結果、離島独特の海岸での風景と楽しさ、来島者に配慮した観光的な要素と対象地域の雰囲気の良い間に正の相関が有意であった。逆に、耕作放棄地など荒れた畑などは愛着と負の相関関係が有意であった。また、相関関係は弱いものの、滞在時間が長かった人は「みかんをもらった」など現地の人との関わりが多い傾向があり、現地の人との関わりと対象地の愛着との間に正の関係性が確認された(有意水準 10%)。本研究の結果からは海や山など自然の要素を散策中に印象に残ったものにあげる人は多かったが、必ずしもそれが離島の好印象に結びついておらず、むしろ自然そのものではなく堤防や漁港などの社会基盤も含めた風景や現地の人との何気ない交流が島への愛着を増進させ、総合的な島への好意に結びついていることが明らかになった。

観光による離島振興策を考える際にしばしば自然の豊かさを強調したり、イベントをしたりすることが多いが、社会基盤も含めた島の人々の暮らしとそこからにじみ出てくる日常生活の中での人々との交流を重視することが重要であるといえる。

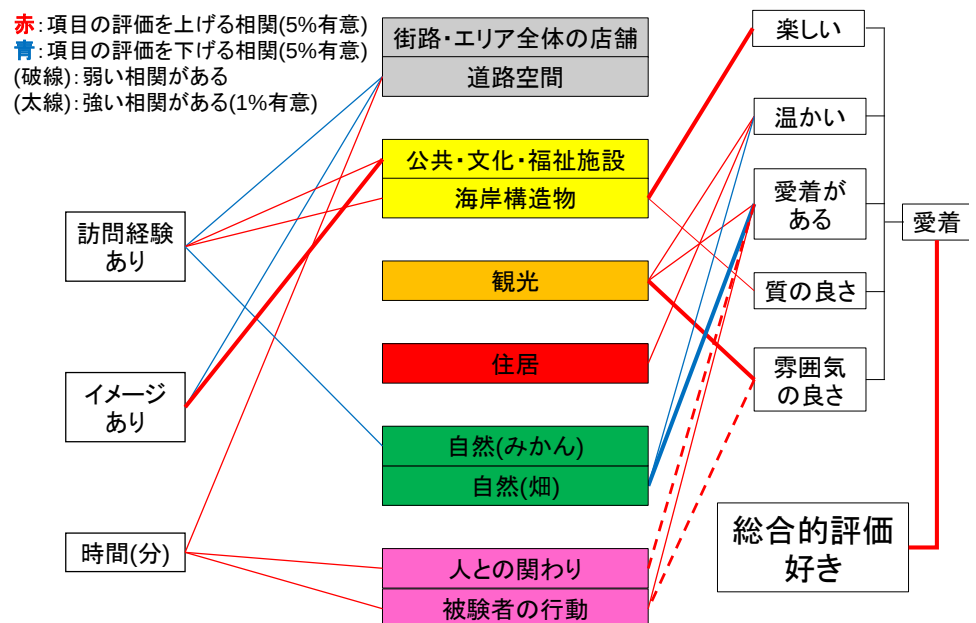


図-2 散策時に反応した空間要素と心理量との相関関係